

書評

## 『現場発 スローな働き方と出会う』(後編)

田中夏子・杉村和美著 岩波書店(2000円+税)

中川雄一郎(明治大学/協同総研)

(前号(No.143)より続く)

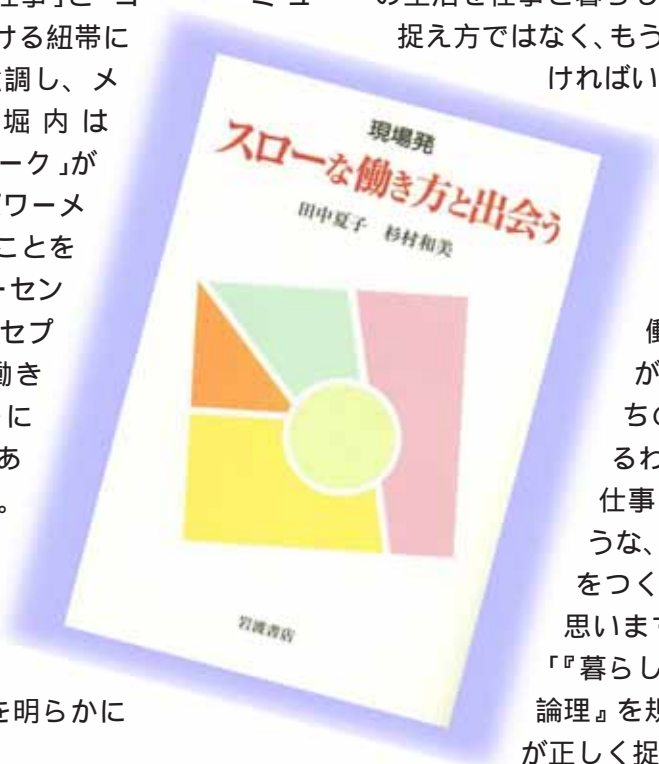
「座談会『スローな働き方と出会う』」で著者の田中と杉村は、「生きにくさ」・「働きにくさ」を乗り越え、克服していくには、それらを「暮らし」と「仕事」と「コミュニティ」を結びつける紐帯に変えていくよう強調し、メインゲストの堀内は「ディーセント・ワーク」が「仕事」と「エンパワーメント」と結びつくことを指摘して、「ディーセント・ワーク」のコンセプトと「スローな働き方」のコンセプトには共通する要素があることを示唆した。そして三人はその共通要素が「『市場の論理』を規制する『暮らしの論理』」であることを明らかにした。

では、「暮らしの論理」が「市場の論理」を規制する、とはいかなる実体を意味するのだろうか。これについて杉村は的確に、「『労働とは何か』を問い直すこと、労働とは協同の営みなんだ、ということを実感できるよ

う」にすること、「『労働とは何か』を問いかけるような取り組みをしていかなければならない」ことだと答えている。田中も「人間の生活を仕事と暮らしに切り分けたような捉え方ではなく、もう少し総合化して見なければいけない」と述べて、生活における労働の位置づけを求めた。さらに堀内は次のように主張した。「もう一つ重要なことは、働いている時間は、人が起きている時間のうちの大部分を占めているわけですから、やはり仕事が楽しいと思えるような、そういう仕事・職場をつくるべきではないかと思います」と。要するに、「『暮らしの論理』が『市場の論理』を規制する」とは、堀内

が正しく捉えているように、「労働の原点」・「仕事の原点」を取り戻すことなのである。

古典派経済学の領袖アダム・スミスは「労働」をしばしば「骨折り」や「労苦」と表現した。スミスの時代はいわゆる「マニユファ



クチャーの時代」であって、労働者は独立性をある程度保持していたとはいえ、次第に独立性を失っていく。やがて労働者の独立性は、すべてではないにしても、産業革命の進展とともに失われていく。スミスが表現した「骨折り」や「労苦」という労働は19世紀にはいると労働者の間では当たり前のことになっていった。そのような状態に反対して19世紀の20年代以降熟練職人や熟練労働者が労働者生産協同組合運動を展開したのも、失ってしまった「自分の労働」・「自分の仕事」を取り戻そうとしたからである。

シャルル・フーリエが、現行の資本主義社会では「魅力ある労働」は実現されないと考えて、「ファランジュ」(ファランステール)と称するコミュニティを建設し、そのコミュニティで「魅力ある労働」を実現しようとしたことはあまりに有名である。彼は、一方で分業の推進、1日8時間労働でおよそ2時間毎に労働分野を交替(1日4回のローテーション)などを勧め、他方でより良い労働環境の下での労働(労働者は気品と清潔さを身につける)、労働の権利の保証(労働に参加する権利の保障)など、協同労働のための7つの条件を示した。7つの条件は「賃金制度の廃止」を意図したものであるが、その原点はいかにすれば「魅力ある労働」をファランジュの住民が実現し、実感するようになるか、ということであった。フーリエ主義者たちは、フーリエの教説に従って、アメリカでファランジュを建設して「自分の労働」・「自分の仕事」を遂行し、かくして「暮らし」と「コミュニティ」を一体化するべく「実験」を試みたが、成功は叶わなかった。

しかしながら、フーリエの理想は、現在も消え去ることなく、われわれに「魅力ある労働」はどうすれば実現でき、それを実感でき

るのか、を問い続けている。「労働とは何か」あるいは「労働は協同の営みである」との問いかけは、現代人によるフーリエの理想の追求であると同時に、現代人が絶えず向き合う実践的課題の追求でもある。「スローな働き方」はまさにそれを実践している人たちによる現代的課題への一つの回答である。

そこではじめに戻って、「暮らしの論理」が「市場の論理」を規制するとはいかなる実体を意味するのか、もう少し具体的に論及してみると、杉村が田中に対して「農村女性の無償労働に替わる取り組みとして、『市場化』ではなく『社会化』すること」の中身を問うている点が問いかけに対する手がかりを与えてくれる。そしてそれに対する田中の回答は、「社会化」の中身だけでなく、「労働の原点」・「仕事の原点」についても触れることになる。

無償労働に代わる取り組みとして、「市場化」ではなく「社会化」を実現すべきだとの田中の主張は、座談会では「保育の話で言いますと、子育て[について]...自分で担っていくという部分をどこかに残しておかないといけない。そうでないと、どんどん自分が消費者化していきます。完全に消費者化しないで、つくることにも関与しながら消費していく、ということだと思います。...『担う』というのはどうしてもボランティアな側面をもちます。これは否定しようがない。これまではそれを女性が担ってきたわけですが、そこに男性にも参加してもらいながら、共に担っていくことを「社会化」というふうに言っています」というものである。本書では田中は「女性たちが積み上げてきた事業を積極的に取り上げるということは、命や暮らしを支える農や地域の仕事を、市場の論理で切り捨ててしまおうとす

る考え方に異議を唱えることとつながらなければ意味はありません。一方、だからといって無償労働の部分を単に賃労働化すればいいというわけではありません。社会的・経済的評価の対象としてきちんと位置づけると同時に、それだけ大事なものならば、多くの人が手をかけてそれを守っていく仕組みが必要とされます。農村女性たちの無償労働に代わる取り組みとして、評価及び保障と同時に、それを『市場化』とは異なる論理で『社会化』していくことが求められます。座談会でも本書でも、田中は、無償労働を経済的、社会的に評価する場合でさえ、「市場化」(消費者化、賃労働化、価格化)ではなく「社会化」(ボランティア労働、コミュニティの活性化・再生、人びとの関係性)という側面から捉え直していくことの必要性を強調している。

これは私的な家庭内労働を単に社会化することを意味しない。私的(家庭内)労働を社会化することは即賃労働化すること、市場化することだと論じる人がいるが、それは正しくない。オウエン主義者のウィリアム・トンプソンはかつて、個々の家庭で女性によってなされていた私的な家事労働がコミュニティにおいては社会化されると論じたが、それは、賃労働化、市場化を直接意味するのではなく、共同の家事労働の協同化であり、そうすることによって女性も男性と同じようにコミュニティ内のさまざまな労働や仕事に従事できるようになることを意味した。トンプソンが主張したように、社会化は市場化と必ずしも同じではない。要するに、労働の社会化は市場化と重なる部分もあれば、重ならない部分もあるのである。トンプソンの社会化論を現代に応用すれば、コミュニティのニーズに根ざした仕

事おこしや自己雇用は労働の社会化であり、地域内市場を創りだしはするが、むしろその地域内市場は女性の無償労働を評価する機能を果たすのであって、ボランティア活動を活発にし、人間関係を豊かにして、コミュニティの活性化や再生に寄与する、ということになるだろう。その点は、本書で、農村女性によるコミュニティ・ビジネスが「いろいろな生活課題とバランスを取りながらの取り組みが多いようです。従来 of 市場の論理からすれば、事業としては中途半端という見方もあるでしょうが、むしろボランティアとビジネスの新しいコンビネーションとも言える」と論じられている。

杉村は、ワーカーズコープ・アスランの現状を見つめながら、「事業である以上、市場経済とは無縁なところで動いているわけではなく、同じ土俵で競争し、生き残っていかなければなりません。事業事態を維持・拡大していくこととは、往々にして矛盾を来とし、そのバランスをとるのは並大抵のことではありません」と述べて、その対応を「地域のニーズと切り結ぶ仕事を開拓」すること、いくつかの「事業体がお互いにつながり合うこと」に見だし、またそのことを通じて「市場経済に対して何らかの影響を与えることが可能になる」ことを期待している。これも「スローな働き方」の一つの側面である。したがって、「スローな働き方」は、コミュニティ・アイデンティティをどのように創っていくか、という課題と結びついているということになる。

スローワークには「二つの論点」があり、一つはスローワークとの「出会い方の多様性」であり、もう一つは「普遍的な価値を備えている」ことである、と田中は言う。前者は「多様な試行錯誤が存在して」いることを

意味し、後者は現在の労働者が置かれている状態と関連する「多様な回路」が存在していることを意味している。私は、田中と同じように、これらは「従来の働き方」に対して一石を投じるほどの価値をもつものである、と考える。

「スローワーク」は多様であり、普遍的であり、そして人間的であることが本書の至る所で語られている。何故、スローワークが求められるようになってきたのか、その理由は本書を読み取っていくうちに次第に明確になってくるのだが、結局のところ、多様であり、普遍的であり、人間的であることに行き着くのである。そして、そこに行き着くまでの読者と本書との「対話」のプロセスが「労働の原点」・「仕事の原点」も明らかにしてくれるのである。その意味で、本書の真の価値は、本書と読者との「対話」がわれわれに労働と仕事のインスピレーションを与えてくれることにある、と私は強調しておきたい。